

三重県育成イチゴ新品種「うた乃」栽培マニュアル

三重県中央農業改良普及センター

■1 「うた乃」の取り扱いについて

(1) 「うた乃」について

- ・ イチゴの主要病害である炭疽病抵抗性を付与し高品質種子繁殖型イチゴ品種として、三重県が独自に育成し、令和4年3月に品種登録出願し、同年9月に出願公表された品種
- ・ おもな品種特性は、以下のとおり

- ✓ 果形が円錐形で、そろいが良い
- ✓ 果皮・果肉とも赤い
- ✓ 糖度は高く、独特な風味がある
- ✓ 収穫開始時期が早く、11月中下旬からの収穫が可能
- ✓ 収量は、「かおり野」にはおよばないものの「よつぼし」よりは多い
- ✓ 炭疽病に関しては、「かおり野」と同等に強い抵抗性を有する



(2) 種苗供給体制について

- ・ 県独自品種として供給できるよう、当該事業を活用し、一次育苗苗を生産できる県内業者を新たに育成することで、県独自の種苗供給体制を構築

(3) 種子繁殖型品種による新たな栽培体系

- ・ 「播種」に関して、イチゴの種子は微小で取り扱いが難しいこと、発芽時の管理を一定条件にするなどの対応が必要となることから、専門の育苗業者による「一次育苗」が一般的であるが、生産者自らが播種し育苗することも可能
- ・ 鉢上げによる「二次育苗」から育苗の開始となるため、栄養繁殖型品種と比べると、4月から6月までの育苗管理が省略でき省力化を実現
 - ➡ 従来の育苗と比較した育苗労力削減効果（苗購入の場合） 74%
（自家播種の場合） 81%
 - ➡ 4月から6月分の化学農薬、化学肥料の使用回数の削減が可能
- ・ 下記③の「本圃直接定植」を行うことでさらなる省力化が可能
 - ➡ 従来の育苗と比較した育苗労力削減効果（自家播種の場合） 27%

育苗方法	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月		5月
① 栄養繁殖型品種による従来の育苗	親株定植	親株管理	親株管理	ランナー受けによる子苗育苗	—	本圃定植	—	収穫	→	
② 種子繁殖型品種による二次育苗		播種 (一次育苗)	(一次育苗)	鉢上げ (二次育苗)	(二次育苗)	本圃定植	—	収穫	→	
③ 種子繁殖型品種による本圃直接定植		播種 (一次育苗)	(一次育苗)	(一次育苗)	本圃定植 (本圃育苗)	(本圃育苗)	—	収穫	→	

※「播種」、「一次育苗」については、業者に依頼し購入する方法と生産者自らが行う方法の2パターンがある。
業者に依頼した場合、作業を省略することが可能となる。

図1 従来の栄養繁殖型品種と比較した種子繁殖型品種の栽培体系



図2 種子繁殖型品種による2種類の栽培体系のイメージ

■2 化学農薬使用削減に向けた取組

(1) UV-B ライトの導入

① 使用機材

- ・ UV-B電球形蛍光灯
(パナソニック ライティングデバイス(株)社製)

② 機材の特長

- ・ 植物病害を抑制する紫外線(UV-B)を照射することで、イチゴの免疫機能を活性化させ、イチゴうどんこ病の発生を抑制(販売会社の商品説明資料より一部引用)

③ 設置方法

- ・ 販売会社資料を基に、販売担当者の助言をもらうなど、設置する圃場条件に応じた設置方法を確認して対応する必要あり
- ・ 基本的な設置方法については、以下の表1とおり



表1 本圃栽培期における設置のポイント

栽培期間	設置のポイント
本圃栽培期 (10月～6月上旬)	・ 高設ベンチの上面から 1.2mの高さに、2.5～6.0m間隔、列間が5～6m 間隔となるよう設置 ・ ハウスの壁面からは、0.5～2.0mまでの位置となるよう設置

④ 点灯時間

- ・ 0時から3時までの夜間に3時間

⑤ 注意点

- ・ 深夜に点灯するため、外部からコガネムシ類や鱗翅目類の害虫の誘引効果があるため、害虫対策としてハウスサイド等への防虫ネットの展張が必要
- ・ 生育により植物体から光源までの距離が短く(1m未満)なり、葉焼けが生じる場合は、点灯時間を短くするなどの調整が必要



(2) アザミウマ類に対する天敵・防虫ネットの導入

① 導入資材と使用方法

《天敵1》 ククメリスカブリダニ (商品名:ククメリス®EX)

- ・ 秋から天敵を放飼する場合は、頂果房の開花以降にククメリスカブリダニを放飼して越冬前からのアザミウマ類の防除を実施
- ・ 越冬後のアザミウマ類を持続的に防除するために、2月頃に再度ククメリスカブリダニを放飼する。

《天敵2》 アカメガシワクダアザミウマ (商品名:アカメ®)

- ・ 天敵自体の越冬が難しいため、放飼は2月以降とし、それまでは化学農薬散布で発生を抑制
- ・ 天敵の世代をバラつかせ、防除効果の波を軽減するため、2週間程度の間隔で2回に分けて放飼

《防虫ネット》

- ・ 糸に薬剤(エトフェンプロックス)を練り込んだネットとして「虫バリア®」を使用
- ・ 本圃定植までにハウスサイド及び谷部分に展張



② 天敵導入による防除体系

- ・ アザミウマ類の天敵として、上記の「天敵1:ククメリスカブリダニ」を放飼するパターンと、「天敵2:アカメガシワクダアザミウマ」を放飼するパターンの2つに分けた防除体系として整理
- ・ なお、当県内では、ミヤコカブリダニの導入事例が多いため、併用した体系として整理

表2 アザミウマ類を対象として天敵を用いた防除体系

導入技術		《天敵1》 ククメリスカブリダニ	《天敵2》 アカメガシワクダアザミウマ
時 期	定植まで	防虫ネットの設置	
	9月下旬	定植	
	10月中旬	● エマメクチン安息香酸塩乳剤の散布 ※ 天敵導入前にアザミウマ類や鱗翅目等の広範囲の害虫を抑制	
	10月下旬	● ミヤコカブリダニの放飼 ※ 放飼量の目安:10a あたり1万頭 ※ ハダニ類の持続的防除 ※ エマメクチン安息香酸塩乳剤の散布から 10 日程度あける ※ ミヤコカブリダニ放飼前の時点でハダニ類の発生が確認される場合は、アシノナビル水和剤を事前に散布	
	11月上旬	● ククメリスカブリダニの放飼 ※ 放飼量の目安:10a あたり30万頭 ※ 越冬前からのアザミウマ類の持続的抑制	● ルフェヌロン乳剤の散布 ※ 越冬前のアザミウマ類抑制
	1月下旬	—	● シアントラニリプロール水和剤の散布 ※ アカメガシワクダアザミウマ放飼前のアザミウマ類抑制
	2月中旬	● ククメリスカブリダニの放飼 ※ 放飼量の目安:10a あたり20万頭 ※ 越冬後のアザミウマ類の持続的抑制	● アカメガシワクダアザミウマの放飼 ※ 放飼量の目安:10a あたり1万頭 ※ 越冬後のアザミウマ類の持続的抑制 ※ シアントラニリプロール水和剤散布から 10 日程度あける
	3月上旬	—	● アカメガシワクダアザミウマの放飼 ※ 放飼量の目安:10a あたり1万頭 ※ 回数を分けることで、天敵の定着率の向上と、世代(幼虫、成虫)の多様化を確保 ※ 1回目の放飼から2週間程度あける
	3月下旬 ～ 4月上旬	● スピノサド水和剤の散布 ※ ハウス側窓換気開始後、アザミウマ類の屋外からの侵入を抑制するため、天敵主体防除から化学農薬主体の防除へ切り替え	
	4月下旬 ～ 5月上旬	● フルキサメタミド乳剤の散布 ※ ハダニ、アザミウマ類、鱗翅目をまとめて防除 ※ 天敵への影響が非常に強いいため作終了前の最終防除(作終了予定日の3週間前)とする	